ぐんま日独会報

発行人
平形義人
発行所
ぐんま日独協会
事務局
前橋市城東町1—18—21
電話 0272-31-4019

設立一周年を迎えて

会長　平形義人（渋川市医師）

「ドイツ好き集れ」と上毛新聞が報道したのは昭和六十三年三月十二日で、朝日その他の各紙も、「ぐんま日独協会」設立のことを次々と報道し、四月十七日、前橋商工会議所会館で設立（総会）記念パーティが開かれました。

幸いにも当日はH・J・ハリヤー駐日大使閣下一家が御出席下され、「民間ベースの日独交流こそ、我が期待するところ、何なりと応援を惜しまない」との御挨拶を頂き、清水群馬県知事より「ようこそ群馬へ」と歓迎の辞が交わされ、三百人に及ぶ参会者を得て、大成功裡に催されたことは誰方も認めた所であります。次いで七月二十四日前橋中央公民館に於いて、第二回ぐんま日独協会総会が催され、組織が確立された訳ですが、はからずも私が初代会長に推されましたことは、誠に身に余る光栄と思い微力乍ら本会発展の為に尽くしたいと考えておる次第であります。

振り返って見れば明治時代から本県とドイツとは深い交流があり群馬の歴史に刻み込まれている事は我々のよく知る所であります。これ迄に日独親善の拠点となる組織がなかったことが不自然とも考えられます。偶々県当局に国際交流課が新設された事も、「ぐんま日独」の設立気運を生みだしたとも云えましょう。現在日独協会は東京を中心として北海道から九州まで三十六団体できており、東京のものは財団法人として永い歴史を持っております。ドイツ連邦に於てもやや同数の「独日協会」があり、全国連合体として活動しておる所から、日本側としても昨年十月連合体に発展する事となりました。この会議には「ぐんま日独」を代表して私と佐藤事務局長が出席しましたが、我々の今後の活動に対し連合会からも支援を得られるものと期待しております。

昨年は別記の通り県内各地で多くの日独交流が行なわれ、会員各位の活動を見ましたが、内に対しては友情と団結、外に対しては「HERZLICH WILLKOMMEN IN GUNMA」を合言葉にして行きたいと思います。

今日では海外旅行が自由化されて誰でも簡単に行けますが、今から三十年前は容易ではありませんでした。昭和34年7月私を始めてドイツへお連れ下さった日本国際医学協会名誉理事長石橋長英博士は現在九十六才の高令ですが、ぐんま日独協会の設立を非常に喜んで下され群馬の皆様に宜しくとのことをお伝えして私の御挨拶とさせて頂きます。

昨年の設立総会で挨拶する平形会長

国際交流とその心構え

群馬大学長　前川　正

我が国が国際社会の一員として、その責任を果し、世界に貢献するには、もはや政府による外交という手段だけでは不充分となっております。私共が直接関わっております学問の領域は、芸術やスポーツと同様、元々国際的であって、地域に限られたものではありませんので、逸早く国際化が進みました。然し、これまで国際化とは無縁と考えられた農業をとってみても、私共の食物の多くは海外から到来しますし、国産の農産物も烈しい国際競争に晒されております。県内の企業で海外進出を果しているところも沢山あります。かつて外国人を当地で見ることは稀でありましたが、昨今その姿に接しない日はむしろ少なくなりました。

今や県民のすべてが、様々なレベルで海外と関わる様になったと言って過言でないと思います。かくて、一定の分野や地域に限定することなく、広く国際交流に取り組むことが要請されるに至りました。

国際化とは物、金、技術、情報、人およびこれらの総体としての文化などの国境を越える往来の増加と定義することができましょう。この様な交流を盛んにするといって特に構える必要は本来ないと考えております。私共は群馬に住んでおりますが、そこに閉じこもっているわけではありません。任地が変われば別の地区へ移り住むこともありますし、旅行者として他県へ出掛けることもあります。逆に居住者として、或は旅行者として他県から本県へ来る人も少なくありません。これらに伴って物なども移動しますが、特に支障がありません。それは同じ日本語を話し、風俗習慣も共通するからでありましょう。国際間の交流はこれらに比べると障害の多いことは確かでありますが、本質的には差はないと思います。同じ人間同士、互いに溶け込める筈であります。地域社会が国際化と取り組み交流を長続きさせるためには、上記の心構えのもとにお祭り騒ぎを避けることが大切でしょう。

（群馬県国際交流推進懇談会委員長）

日独両ロマンチック街道の姉妹締結の調印式を終えて

副会長　中沢晃三（草津ベルツ協会長）

昭和六十三年十一月二十五日、日独両ロマンチック街道協会は世界ではじめてロマンチック街道同志の友好関係を結ぶ調印式を草津町で行った。このことは日本にとっても、ドイツにとっても意義深いことであった。

この会の席上でドイツロマンチック街道協会を代表して、バイエルン州経済運輸省次官イマプセン氏は、「観光業は人々との出会いであり、人々の視野を広げ、知識を集める機会だと思う。そして、この証が日独両ロマンチック街道の姉妹締結である。

〃ロマンチック〃この言葉の意味を深く理解して、両国民の人間形成に役立てよう。」という意味のスピーチを行いました。

〃ロマンチック〃この人々の心に泌みる言葉を深く追求することが、これからの吾々の課題であろう。

ドイツロマンチック街道はドイツローマン派の詩人たちが集まり、多くの作品を残している街道すじである。

中世の古都を結び、ローマへ通ずるこの街道にはロマンに溢れる城々や砦や教会、そして宿駅、牧歌の聞えて来そうな町や村がある。

草津町の町民憲章になっている古都ローテンブルクの城門に刻まれた

歩み入る者にやすらぎを
去りゆく人にしあわせを
（東山魁夷訳）

がある街道である。

さあ旅職人の杖と服をおくれ
この美しい夏の日にフランケンの地へ旅立とう
（東山魁夷訳）

多くの日本人がこの街道のロマンを求めて旅立つにちがいない。

日本ロマンチック街道も、多くの日本の詩人たちが訪れ、多くのすぐれた作品を残しているところである。

火山が造り出す造型美は世界第一級である。二つの国立公園を結ぶ街道には、中世の城下町や日本の第一級の避暑地や温泉町や門前町がある。そしてその間にある美しい村や町、この街道は、日本人とドイツ人の心を捉えてやまないであろう。そこに愛と平和を布う心が生れるに違いない。

この締結式に当って草津町と沼田市のぐんま日独協会の会員たちにお世話になったことを特記したい。

合唱で日独親善交流を

高崎第九合唱団長
音楽家・元群大教授　斉藤　民

苦しみをのり越え歓びに至る、この言葉を心にもっとよいハーモニーが有るのではないかと、ベートーヴェン交響曲第九番合唱を歌い始めて十五年が経過しました。

過ぎた十五年は短いようですが、生まれた子供が高校生になった話を聞きますと漸く此処まで来たなと云う感慨も致します。過ぎてしまえば何事も大過なくのひとことで片付けられますが、様々な事がありました。

第九の合唱〃喜びの詩〃に魅せられた市民が集り歌い始め夢中で歌う内に、

〃お、友よ！この調べではないもっと快くもっと喜びに満ちた歌にしよう。

そして　数百万の人々よ兄弟よ、星空の彼方住んでいる創造主を求め喜びの歌にしよう〃

ベートーヴェンのメロディーとシラーの詩の心に近づこうとし、それぞれの努力が年末の演奏会に結集され高らかに歌いあげられます。

私達アマチュア合唱団はプロと比肩すべくもありませんがその分〃心で歌う〃合唱を心掛けて参ります。自分なりに得る内にもっと近づきたい、それが誕生の地ドイツで歌いたいと云う事になりました。

幸いハイデルベルグ市の秋の音楽祭に招かれる事になりました。私達はこれを受けて合唱団の希望と憧れを実現させる為にぜひ成切させたいと努力しております。これが音楽文化を通じ日独親善の一助になればと思っております。合唱を通じて国際交流を行う事は、合唱を心の糧とする私達の使命とも思われます。喜びの歌を持ってドイツへぜひ皆様も御一緒していただきたいと思います。

ドイツの感動

副会長（県立女子大学教授）
小林　喬

ドイツの景色はすばらしい。まるで絵から抜け出たような美しい所が随所に見られる。おとぎの国に居るような錯覚さえおこしかねない。中世の人々がドイツは旅する国と言ったのも頷ける。尖塔がそびえる中世の教会を中心にして、木組の家並が広がる城壁の中の街並には、近代建築といえども受け入れられる美的余裕は存在しない。それ程までに完成した美を中世から今に伝えている。古くなった木組の家は、再び修復されて元のように建て直されている。新しい近代的な家々にしないのも、伝統を守るドイツ人の特有の美的感覚故のものなのかも知れない。ドイツ人が持ちあわせているすばらしい美的財産とも言えるであろう。

ドイツ人が家をきれいにし、街並を美しく、自然を大切にしているのも、永い世代に渡って受け継がれてきた美意識が、このように調和のとれた美を求め続けさせるのであろう。こうした美しい環境の中に住むことは、自己の単なる美的欲求を満足し得るのみではなく、世代を受け継ぐ子供達の情緒の発達にも、さらには文学的感性の発達にも影響を及ぼすものである。ゲーテ、シラー・ハイネ・ヘルマンヘッセ・トーマスマンと文豪名を挙げれば、誰しも感動して読みし作品の数々を想い出すであろう。世界の人々の心に感動を与え続けている数々の作品の蔭には、やはりドイツ人が造り上げた美しい自然との調和の中の生活空間の中で育まれた美意識の影響を見逃すわけにはゆかない。

毎年の如く、ドイツのあちこちを歩き廻るのであるが、その都度、新しき感動を覚えるのである。それは時代が移り変り、人々が代っても、永々として流れ伝わっている美的感覚を街造りの中に見出し得るからである。こうしたドイツの街並はいつも私の心を捉えてやまない。

祝　設立一周年

財団法人日独協会会長
全国日独協会連合会会長
丸田芳郎

衆議院議員
内閣官房長官
小渕恵三

衆議院議員
前文部大臣
中島源太郎

元参議院議員
群馬県商工会議所連合会会頭
佐田一郎

衆議院議員
前総務政務次官
熊川次男

参議院議員群馬地方区
山本富雄

キリンビール高崎工場長
村田宏美

ドイツ管見

顧問　井草　憲太郎（高崎井草病院）

今独乙は東西の独乙に分断され、夫々東・西陣営に属し、戦前の独乙からみると、バルト海に臨む部分をソ連に、その南方の地域とシレジアとポメラニアの現東独乙の東南北に延びる広大な地域とをポーランドに割譲し、東はナイセ河からエルツ山系を迂回しボヘミア森林地帯に入る手前で西に折れ、チューリンゲン森林地域から北上し、ハルツ山系を縦断し更に北上しエルベ河を下ってリューベックに至る地域―加えるにブランデンブルグ門を中点とする南北線の「ベルリンの壁」の東側ベルリン、これが東独であり約千九百万人の独乙人が住み独乙民主共和国を作っている。西はボヘミア森林地帯から更に南下しザルツブルクから伊太利、瑞西の北部山嶽地帯を西に折れ「父なるライン」に浴い北上しマイン河、モーゼル河の支流を抱きつつ、佛蘭西ルクセンブルク、ベルギー、和蘭の東北国境に浴い、エムス河の河口の北海迄が西独乙である。ザール問題は佛蘭西との間に或る協定を殘しつつもEECの一員として、今次大戦で日本と同じく一番壞滅の悲運を嘗めた西独乙が、共に経済大国になっている。EECは近く英佛の協力で更に強化される。

何故詳しく地形を述べたかというと、西独は十ヶ国の国境に接し東方国境にはMXミサイルやパーシングⅡのINFが沢山米軍により配備されていい、他方東独やチェコの西の国境にあるSS20やSS22はソ連によりINFとして配置され、今度INF廃止の政治決着が米ソの間で決定し、米国は相当譲歩した。西独はドルトムントとドウイスブルク間に西欧全体の三四%の石炭と三一%の鉄鋼を供給しているルールを持っていて、伯林ルールザール国境地帯には米軍が毅然として基地をおいている。

「伯林の壁」程分裂国家の悲劇を示すものはない。故大統領J・ケネディ、弟法相R・ケネディ（共に暗殺さる）は「この壁は共産主義の敗北を示すのみ」と喝破したが、同感である。

西独の国歌は百年も前のビスマルク時代の「第二帝国」時代に作られたものだが、今も同じく歌われている。いつの日か統一国家が作られることを切望はするが、統一化はないであろう。公式にはボンは西独の仮首都である。

経済による侵略戦争が益々激化苛烈化する中で、安保条約による日本国憲法の空洞化を惧れつつ稿を終る。

○昭和史は戊辰に閉じんとす　侵略と敗戦腐臭の繁栄を経て

沼田ドイツ語会のこと

副会長　角田　勤（沼田市医師）

ドイツ好きの五人で始めた沼田ドイツ語会が今年六月、満十年を迎えます。メンバーは延三十人を数えますか、転勤や結婚などの都合で休んでいる人が半分以上おりますので、現在は十人前後でドイチェアーベントを楽しんでおります。

ここ二年ばかり、会員多忙のため、会はやや低調ですが、十年を機に活発に活動してゆこうと思います。

嬉しいことに、我が会には応援団ともいえる準会員が十人ばかりいて、会報の「ドイチュ・フュア・ウンス」に時々投稿して下さいます。その中にはドイツ人もおり、生の情報を頂けるのは有難いことです。

時に骨休みすることはあっても、とにかく我々のドイツ語会が、今日までよくも続いて来たものだと我ながら感心いたします。それはメンバー各自のドイツやドイツ語に対する関心の深さに拠るものですが、特に石井昭夫会員（後閑〝夢〟）のドイツへの熱烈な愛情と堤元久会員（眼科医）のドイツ語への真摯な姿勢によるところが大きいと私は思います。心地よくドイツ民謡の流れるゲミュートリヒなお店で「ドイツはいいよ、ミュンヘンはとてもすばらしいよ」と石井オンケルが語り始めると、大抵の人は魔法でもかけられたようにドイツ好きになってしまいます。かく言う私も十数年前、オンケルから魔法をかけられた一人ですが…。

我々のドイチェアーベントは勉強半分、歌やおしゃべり半分という気楽な集りで、いつも夜の更けるのを忘れる程です。堤先生の講義は、どこかで教鞭を執っていたのではないかと思われる程堂に入ったもので、文法が特にお得意です。おかげで我々生徒も随分上達しました。苦手はドイツ会話で、桑原俊夫君（内科医）や私などがビデオやカセットでいろいろ試みましたが、うまい方法がありません。将来、ドイツとの交流が盛んになることを願っております。

日本ロマンチック街道が脚光を浴び、そのまん中に位置する沼田市、我が沼田ドイツ語会は、より一層日独交流親善のために努力してゆきたいと思います。

昭和63年12月11日　役員会

ひとこまの追想

群馬大学医学部教授　亀井民雄

一九七七年六月下旬某日、私は当時西独ウルム大学神経学教室にフンボルト研究員として滞在中であったが、突然S教授（ただし主任教授ではない）に野外パーティに招待され、夕刻、郊外の森のその場所に出掛けた。彼の乗馬の馬小屋がその場所であり、二十名程の友人・知人が参集していた。小屋はすぐに闇に包まれ、小屋の中の薄暗い電灯の下、新たに敷かれた枯草に思いおもいに腰を下ろし、ビール・ワインを飲み、あるいはソーセージを焼いて食べながら歓談した。外に出されていた馬がときおり暗闇の中から小屋の中を覗き込み、その都度私は驚かされた。雰囲気は野趣があり知的にも思えた。

招待者はSと、そして彼の同棲者であった。同棲者は元病院秘書であるが、大変に美人で理知的な人であった。もちろん、彼の別居中の夫人は出席していなかった。しかし、彼とその夫人の間の二人の子供は招待されてパーティに参加していた。彼らは十六歳の少年と、十四歳の少女であり、ふだん母親と一緒に生活し、暗い影は全くみられなかった。

その四―五年前に、私は、やはり同じ身分で同じ教室に約一年間滞在したことがあり、したがって私はS（当時は講師であった）も夫人も、以前からよく知っていた（当時、彼らは別居していなかった）。そのときの記憶によれば、夫人はやや太り気味の、親切な、母性的な感じのする女性であった。そのため私は、彼女が今はじっと堪え、夫が再び戻って来る日を待っているように思えてならなかった。

一方、S教授は合理的な思考の行動的な人物であり、私は決して嫌いではなかった。むしろ、私は彼に密に兄事し尊敬もしていた。私はある日、親しい同僚のM助手に、何故Sは正式の夫人と別居しているのだろうかと尋ねてみた。Mは多少困惑した顔をしたが、しかしきっぱりと、Er denkt aber wahrscheinlich, es gäbe mehr im Leben.（彼は多分、人生にはさらに何物かがある筈だと考えているのさ）というようなことをいった。私はそのとき、急に、すべての蟠りから解放されるのを感じた。

ドイツとの交流に期待

群大病院第一内科　樋口次男

佐藤先生より、ドイツ留学中の想い出を何か書いて欲しいとの依頼をいただきましたので思いつくままに書き綴ってみました。

私が文部省の在外研究員として約一年間に亘り西ドイツへ留学させていただいたのは一九八〇年のことですので、もう既に一昔前のことになりますが、前半の六ヵ月はフランクフントで、後半は北海に面したウィルヘルムスハーフェンという北ドイツの小さな港町で過ごしました。

多少専門的になって恐縮ですが、私が勉強させていただいたのは『消化器内視鏡特に胆石症に対する非手術的治療について』というのが主なテーマでした。高令のため或はその他の理由で手術が不可能な患者さんに対し内視鏡を応用して胆石を摘出しようとする試みは、すでに一九七〇年代後半より行なわれておりました。しかもこの治療法は日本と西ドイツで殆んど期日を同じくして世界に先駆けてスタートしておりましたが、疾患の例数からして約十倍の症例数を抱えておる当地のクリニックでの研修は、ただ単に技術の修得のみでなく、この治療法の適応のとり方や他の治療法への応用など大変学ぶべきことが多く、それ以降の私の研究生活に大いに役立っております。

言葉も習慣も全く異なる国での生活には当初全く面食らってしまい最初の二～三ヵ月は失敗の連続でしたが、今ではそれも楽しい想い出となっております。気候については御存知の方も多い様に、冬の寒さは格別ですが戸外の温度に比べ案内の暖房設備はどこへ行っても完備されており、本当に快適な生活が過ごせました。一方、食事に関しては実質を重んずるドイツ人気質そのもので、味はこの次といった印象でした。寒い冬を乗り越えるのに必要なのかどうか、とにかく高カロリーの食物を大量にしかも塩辛い味付で摂っておりますので、肥満と高血圧は成人病対策のメインテーマとなっておりました。

僅か一年足らずの西ドイツでの生活でしたが、ここでは書き尽くせない程のいろいろな体験をすることが出来、それまで全く面識のなかった人達を含め当地で御世話になった方々への感謝の気持で一杯です。また仕事を通じて知り合うことの出来た教授やそのスタッフはその後学会などの機会に時折旧交を暖め合う間柄となりましたが、これら友人は私にとって掛け替えのない財産となっております。

ぐんま日独協会の設立を機に、群馬県のより多くの方々とドイツとの新しい交流が生まれることを願いながら稿を終りたいと存じます。

「ぐんま日独」事始め

事務局長　佐藤進一

ベルツ博士が群馬の地を初めて訪れたのは明治十一年（一八七九年）七月のことである。先ず伊香保、次いで草津まで足を延ばしているが、彼は東京大学医学部教授として温泉の医学的効用について観察していたようである。今から百十年も昔のことで東京から籠（かご）に乗って前橋へ来る迄に二日もかかっている。草津温泉では酸性硫黄泉の強烈な臭いと豊富な湧出量に圧倒された。故市川善三郎氏の「ベルツ博士と草津」に見られる如く、草津の先覚者は代々ベルツに傾倒していた。そして昭和三十八年にはベルツの故郷であるビーティヒハイムと姉妹都市の契りを結んだ。当時大阪屋の御曹子である中沢晃三氏も草津代表団に加わってドイツを訪れている。

我が国の医学は明治年間から大正・昭和に至る迄、ドイツ医学に範を取り臨床に基礎に凡てドイツ至上主義であった。事実十九世紀後半から二十世紀にかけて、ドイツ医学は世界に君臨していた。日独医学協会はドイツ医学志向の日本人医師の団体であるが、戦後、石橋長英博士（東大教授）を会長として日独医学交流を進めていた。市川氏の意向を受けた石橋会長が、草津の姉妹都市に協力したのは極めて当然の成行きであった。当時石橋博士に同行してドイツを訪れたのは渋川の眼科医平形義人博士であった。私は平形医師とは同窓であった（千葉医科大学）縁で、日独医学協会のパーティに誘われて時折り出席する機会をえた。昭和四十年頃の話である。

中沢氏とは旧制前橋中学校同窓の間柄で互いに附合いかあり、彼のドイツ熱の高さはビイテヒハイム訪問以来昂まっていた。ベルツの他、ブルーノタウトを高崎の少林山にかくまった井上翁の逸話もドイツとの深い絆となっている。

以上の要素を構えているこの群馬に日独協会が生れるのは宜なる哉と誰も思うであろう。昨年二月の寒夜ふとこの事に気付いた私は、平形ドクターと中沢さんに電話して賛同を得て、四月十七日の結成大会に驀進することにした。そして県内各地に熱烈なドイツファンの居る事を知った。

現在我が国には三十六の日独協会があるが、昨年十月これらは全国連合体となった。我が「ぐんま日独」は創立は若いが熱意の点では他の協会にひけをとらないと思う。来る四月十六日（日）には結成一周年をトして盛大なパーティを開く予定。多くの会員の声を事務局に寄せて頂き、それに従って会の運営を進めて行きたい。

ぐんま日独協会活動状況

一九八八年

4月17日(日)	設立総会	前橋市	
5月28日(土)	役員会	〃	
7月24日(日)	定時総会	〃	
8月2日(火)	スポーツユーゲント歓迎会	薮塚本町	
8月5日(金)	ウルム音楽家演奏会	前橋市	
8月23日(火)	日本温泉科学大会	伊香保町	
8月24日(水)	日本温泉科学大会	草津町	
10月12日(水)	全国日独協会連合会総会	東京都	
10月20日(木)	姉妹都市25周年	草津町	
10月23日(日)	地区懇談会	高崎市	
11月25日(金)	日独ロマンチック街道記念式典	草津町	
11月26日(土)	日独ロマンチック街道記念式典	沼田市	
12月11日(日)	役員会	前橋市	
一九八九年1月22日(日)	役員会	〃	

ドイツ人とのふれあいはこうして始まった

前橋市清王寺薬局会長
日本肥満予防協会会長
中村鉱一

「昭和」といっしょに消えていくドイツ人との原体験をⅠ～Ⅱ紹介したい。

① 昭和二十一年・極東シベリアの原生林の中、日本人俘虜収容所での事。疲れきった白人労務者十名程を連れて、深夜・浴湯（サウナ式）の扉を開いたソ連人監督将校がいた。「この者達に湯桶一ぱいの湯を与えて入浴させよ。時間は十五分。口を利くな。口外するな。」

熱い空気の中、お湯を体にこすりつけてポロポロあかをこすり落しながらの私語は聞きなれないドイツ語。こうして片言以下の会話がドイツ人捕虜達と始まった。炊事よりこっそりおこげをもらって出したら、飲み込むように頬張りポケットにつめて、「ダンケシエン」を耳元でくりかえした。カメラーデン（戦友）の歌を合唱して分れた。日本人のほうが早く帰るからと、書き残していったドイツでの住所を調べても生死不明である。

② 昭和三十年代のドイツで、東京オリンピック誘致を前に国際免許証の発行をためらう警察庁を先進各国の自動車連盟より促進させようと、私は独・佛・伊を引き受けた。

ミュンヘンにあるADDC（ドイツ自動車連盟）本部で待っていてくれた老令の会長は充実した機能の館内を案内し、占領下の弱体な政府をホローしてアウトバンの整備など、どうやってユーザーの力を結集してきたかを諄々（じゅんじゅん）と説明し、狩猟者のクラブ専用というレストランでディナーをご馳走して宿舎迄送ってくれた。

それまで会長自身で車を運転していたので、「やはり車好きなのだ。」軽く思っていた私は、分れる時、それ迄助手席に坐っていた若い秘書がサッと運転席に、会長は後部座席よりゆったりと手をふって去っていったのをみて強烈なドイツ人のホスピタリティーに頭をひっぱたかれる思いでした。やはりドイツは兄弟なのだと思った。

貧しい歩み

共愛学園女子短期大学
高寺宏延

詩人の言葉を理解することはむずかしい。

二年ほど前、たった二人しかいない学生の希望を入れて、リルケを読むことになった。つごうの良いことに、いわゆる『セザンヌ書簡』がインゼル社から文庫本で出版され、学生にも買える値段だった。若いころ、リルケに圧倒された経験があるので気軽に引き受けたが、これがまちがいだった。これほどきつい仕事はなかった。それゆえ、以下のことは私の理解できたほんのささやかなことである。

恋するものらよ、たがいに寄り添って充ち足りているものたちよ。

きみたちにわたしは問おう、わたしらの存在のことを。きみたちはしかと手をとりかわす、それで証明はついたのか。

みよ、わたし自身においてさえ、左右の手と手が触れあって

たがいを気づくことがある、もしくは生いやつれた。

わたしの顔が、双の手におのれを埋めて憩いをもとめることがある。それはわたしにわずかには

わたし自身を感知させるのだ。だが、誰がそれゆえに自己を確かにあるとすることができようか。

（『ドゥイノの悲歌』第二悲歌、岩波文庫、一九ページ）

ここでリルケは、ハイデガーと同一の苦悩を経験している。クロイツは、その註釈書（Heinrich Kreutz: Rilkes Duineser Elegien, C.H.Beck, München, 1950）の中で「人間の知覚は、よしんば内的なものであっても、はるかに根源的に問う詩人にとっての和歌を一首黒板に書かれての講義でした。ドイツ語より万葉の時間の方が長かったものでした。この歌の意味が分るかときかれ、我々が分らないと答えると滔々と講釈されて最後には涙ぐんでしまうのが常でした。

私は、学内浪人という生活を経験しましたが、この浪人中はもっぱらドイツ語の習得に力を注ぎました。お蔭で医者になってからもドイツ語に親しむことが出来ましたが、我々がドイツ語世代の最後ではないかと思っております。留学するならドイツへと考えていました。

皮膚科の教授は、紹介状のドイツ語に誤字があると大変怒られました。なまじ誤字を書くのなら横文字をやめて日本語で書けといわれました。日本語も漢字を忘れたら当て字を書くより平仮名で書くようにとさとされました。今日、英語が主流をなしている時に私は紹介状を書くのについドイツ語を用いてしまいます。はじめは、今流に英語にしなければと努力はしてみます。でも次の機会に書く時はすでに前に書いた英単語を忘れています。そこでまた辞書をひくことになります。最近ではあきらめて、はじめから英語を用いないでドイツ語にしています。はなはだしい時は英独混在の紹介状となることがしばしばです。

ドイツ語とのかかわり

高崎市医師
神岡順次

一九四〇年代の半ばまで私は小学生でした。田舎の山村に住んでいたので、ドイツとのかかわりあいは全くありませんでした。ただ子供心にドイツという国は、むこう側の国でなくこちら側の国なんだなと感じておりました。敗戦当座は、同じ敗戦国ですからドイツのドの字もなくアメリカ一辺倒だったように思います。然し周囲に医者が多かったので、医者になるならドイツ語を勉強せねばならないだろうとはうすうす感じておりました。

大学へ入学して一般教養課程での第二外国語は躊躇せずドイツ語を選びました。池上講師に文法を学び、房内教授、金井教授、田中講師にはドイツ文学の講義を受けました。

ドイツ文法の格支配は、当初わずらわしいと思っておりましたが、なれてくると非常によいものでした。zur とかüber die と自然に口から出るようになりました。房内先生のゲーテの〝Nafur〟は文体（古文？）がむずかしく難渋したものです。ヤスパースの哲学書も読まされましたし、シュトルムの〝Im men see〟も読みました。この時は、湖面に反射するまぶしい太陽の光や、小鳥が啼いているが静かな森が目に浮び、花の香を運んでくる風が頬を撫でていくのがわかるような気分にひたったものでした。帰省するヒのもとか……。哲学書では、自分の da sein がどうのこうのと大変むずかしかったければ、何か考えるというくせが身につきました。

房内教授の講義は、どちらかと言えばむしろ万葉集の講義でした。毎時間必ず万葉集の講義を一首黒板に書かれての講義でした。ドイツ語より万葉の時間の方が長かったものでした。この歌の意味が分るかときかれ、我々が分らないと答えると滔々と講釈されて最後には涙ぐんでしまうのが常でした。

私は、学内浪人という生活を経験しましたが、この浪人中はもっぱらドイツ語の習得に力を注ぎました。お蔭で医者になってからもドイツ語に親しむことが出来ましたが、我々がドイツ語世代の最後ではないかと思っております。留学するならドイツへと考えていました。

皮膚科の教授は、紹介状のドイツ語に誤字があると大変怒られました。なまじ誤字を書くのなら横文字をやめて日本語で書けといわれました。日本語も漢字を忘れたら当て字を書くより平仮名で書くようにとさとされました。今日、英語が主流をなしている時に私は紹介状を書くのについドイツ語を用いてしまいます。はじめは、今流に英語にしなければと努力はしてみます。でも次の機会に書く時はすでに前に書いた英単語を忘れています。そこでまた辞書をひくことになります。最近ではあきらめて、はじめから英語を用いないでドイツ語にしています。はなはだしい時は英独混在の紹介状となることがしばしばです。

ロマンチック街道を桜並木に

沼田市医師
久保洋

過日私は、日本母性保護医協会（産婦人科医の全国組織）からの原稿依頼で、その機関紙「日母医報」に最近の群馬県の宣伝をすることになり、できたてほやほやの日本ロマンチック街道（小諸市→日光市、二三〇km）を紹介致しました。

そして原稿を書く時、ロマンチック街道全道に日本の花桜の木を植えることができるだろうか。もしできたら国際的に有名な街道になるのではなかろうかと考えました。

一九八八年十二月三日、私の所属する沼田ロータリークラブ（角田勤会長）では、地域の高齢化を憂い、明るい・住みよい・将来に希望を持てる街づくりをめざし、シンポジウム「みんなで考えよう高齢化社会・利根沼田」を開催しました。

その時シンポジストの青年代表が、「国道一二〇号線に桜の木を植えよう」と提案しました。私は「そんなケチなことを言わないで、ロマンチック街道全てを桜並木にしたら。二十一世紀を背負って立つ若者よ大志を抱け！」と励ましました。

続いて翌々日の新聞に、竹下内閣の「ふるさと創生」（座長・小渕恵三内閣官房長官）の記事が出ていました。その後新聞記事に気をつけていると、各市町村に一億円が分配される、市町村はそれを目あてに各種事業を企画中、逆に使い道に困る市町村もあるらしいことが分りました。

この際ロマンチック街道沿道十五市町村が、二十一世紀をふまえた大局的見地から、一億円の何割かを拠出し、街道桜並木化のために同一歩調をとったらどうだろうか（国のプロジェクトなら尚更いいが）地域をあげて日本の花・桜の美しさを、日本の心を世界の人々に教えてあげるのです。これが国民の誰もが納得であるか。ハイデガーはそれを問い求めてゆく。もちろん、そのさきには、あるということの意味を広く求める方向があるのだが、さしあたっては、われわれが生きているというときの、この「いる」の意味を問おうとする。

そのばあい、日々生きているこの現実は、ほんとうの現実ではない。という経験がリルケにもハイデガーにもある。この覆われた現実のヴェールを一枚一枚はぎとってしまわないとほんとうの現実は露われてこないというのだ。

私とドイツ語

――ドイツ語教授の落第点――

渋川市医師
本沢繁二郎

わたしが旧制新潟高校理科乙（医・農・化学系に進学するクラス）に入学したのは、戦雲暗い昭和二十年四月であった。医学部では毎日ドイツ語が日常語のように使われていたのであろうが、高校からはドイツ人の先生も去り、まわりにはドイツ文化の香りすらなかった。

教科書もない方（ドイツ語は二人の教師が教授されていた）の先生は、きれいな文字で、かって入学試験その他に使用した用紙の裏にガリ版の印刷をされて使用されていた。文法は一時間で終了、すぐ小説にはいった。「クヌルプ」や、「若きヴェルテルの悩み」であり、もう一人の先生は、ゲーテの「植物学研究」であった。

前の方の先生のドイツ語の試験点数が発見された。英文学（のち東大文学部長になられたH教授）も使用ずみの用紙の裏にガリ版で「オラーラ」を教えて下さった。使用ずみの紙は氏名が判らないように、濃い墨で名前を消してあるのだが、光線の具合と角度と元の鉛筆の圧力で、名前が判ることがあった。しかし、十九倍の入試とか、十年前の先輩の名とその人とが知り合いでないことは当然であり興味もなかった。（わたしは万年筆のみ使用。）

英文学の時間に突然大声がした。のち、厚生省の医務局長になった某君である。「先生！　こんなのがありました!!」と言ってガリ版ずりの一枚のテキストを高く持ち上げた。皆あっけにとられていた。東大文学部長になったほどの教授が、名調子で講義中であったから。

H教授の所へ持って行った。H教授はそれを見て「困りますね」と一言おっしゃっただけであった。

なんと授業時間が終って、皆で見てみると、ドイツ文学の小説担当の教授の三十点（百点満点）の答案用紙、それも専門のドイツ語の答案であった。

彼はその点で奮起して、東大のドイツ文学を卒業し、母校の教授に赴任したのであろう。ドイツ語の辞書も後年出した。人格者であった。

〝人間なせば成る〟のひとつの見本だとわたしは考える年令になった。わたしはなしても成らない事が多い。ああ。

貧しい歩み

共愛学園女子短期大学
高寺宏延

詩人の言葉を理解することはむずかしい。

二年ほど前、たった二人しかいない学生の希望を入れて、リルケを読むことになった。つごうの良いことに、いわゆる『セザンヌ書簡』がインゼル社から文庫本で出版され、学生にも買える値段だった。若いころ、リルケに圧倒された経験があるので気軽に引き受けたが、これがまちがいだった。これほどきつい仕事はなかった。それゆえ、以下のことは私の理解できたほんのささやかなことである。

恋するものらよ、たがいに寄り添って充ち足りているものたちよ。

きみたちにわたしは問おう、わたしらの存在のことを。きみたちはしかと手をとりかわす、それで証明はついたのか。

みよ、わたし自身においてさえ、左右の手と手が触れあって

たがいを気づくことがある、もしくは生いやつれた。

わたしの顔が、双の手におのれを埋めて憩いをもとめることがある。それはわたしにわずかには

わたし自身を感知させるのだ。だが、誰がそれゆえに自己を確かにあるとすることができようか。

（『ドゥイノの悲歌』第二悲歌、岩波文庫、一九ページ）

ここでリルケは、ハイデガーと同一の苦悩を経験している。クロイツは、その註釈書（Heinrich Kreutz: Rilkes Duineser Elegien, C.H.Beck, München, 1950）の中で「人間の知覚は、よしんば内的なものであっても、はるかに根源的に問う詩人にとっての和歌を一首黒板に書かれての講義でした。ドイツ語より万葉の時間の方が長かったものでした。この歌の意味が分るかときかれ、我々が分らないと答えると滔々と講釈されて最後には涙ぐんでしまうのが常でした。

私は、学内浪人という生活を経験しましたが、この浪人中はもっぱらドイツ語の習得に力を注ぎました。お蔭で医者になってからもドイツ語に親しむことが出来ましたが、我々がドイツ語世代の最後ではないかと思っております。留学するならドイツへと考えていました。

皮膚科の教授は、紹介状のドイツ語に誤字があると大変怒られました。なまじ誤字を書くのなら横文字をやめて日本語で書けといわれました。日本語も漢字を忘れたら当て字を書くより平仮名で書くようにとさとされました。今日、英語が主流をなしている時に私は紹介状を書くのについドイツ語を用いてしまいます。はじめは、今流に英語にしなければと努力はしてみます。でも次の機会に書く時はすでに前に書いた英単語を忘れています。そこでまた辞書をひくことになります。最近ではあきらめて、はじめから英語を用いないでドイツ語にしています。はなはだしい時は英独混在の紹介状となることがしばしばです。

ロマンチック街道を桜並木に

沼田市医師
久保洋

過日私は、日本母性保護医協会（産婦人科医の全国組織）からの原稿依頼で、その機関紙「日母医報」に最近の群馬県の宣伝をすることになり、できたてほやほやの日本ロマンチック街道（小諸市→日光市、二三〇km）を紹介致しました。

そして原稿を書く時、ロマンチック街道全道に日本の花桜の木を植えることができるだろうか。もしできたら国際的に有名な街道になるのではなかろうかと考えました。

一九八八年十二月三日、私の所属する沼田ロータリークラブ（角田勤会長）では、地域の高齢化を憂い、明るい・住みよい・将来に希望を持てる街づくりをめざし、シンポジウム「みんなで考えよう高齢化社会・利根沼田」を開催しました。

その時シンポジストの青年代表が、「国道一二〇号線に桜の木を植えよう」と提案しました。私は「そんなケチなことを言わないで、ロマンチック街道全てを桜並木にしたら。二十一世紀を背負って立つ若者よ大志を抱け！」と励ましました。

続いて翌々日の新聞に、竹下内閣の「ふるさと創生」（座長・小渕恵三内閣官房長官）の記事が出ていました。その後新聞記事に気をつけていると、各市町村に一億円が分配される、市町村はそれを目あてに各種事業を企画中、逆に使い道に困る市町村もあるらしいことが分りました。

この際ロマンチック街道沿道十五市町村が、二十一世紀をふまえた大局的見地から、一億円の何割かを拠出し、街道桜並木化のために同一歩調をとったらどうだろうか（国のプロジェクトなら尚更いいが）地域をあげて日本の花・桜の美しさを、日本の心を世界の人々に教えてあげるのです。これが国民の誰もが納得であるか。ハイデガーはそれを問い求めてゆく。もちろん、そのさきには、あるということの意味を広く求める方向があるのだが、さしあたっては、われわれが生きているというときの、この「いる」の意味を問おうとする。

そのばあい、日々生きているこの現実は、ほんとうの現実ではない。という経験がリルケにもハイデガーにもある。この覆われた現実のヴェールを一枚一枚はぎとってしまわないとほんとうの現実は露われてこないというのだ。

イルゼ・マイヤー先生のこと

㈱コスガ常務取締役
杉本隆雄

一九七〇年九月の新学期、我が愛娘和香は、ハンブルク市ゼートヴェク・フォルクスシューレに入学した。その日、校長先生から紹介されたのが、担任のマイヤー先生、六〇歳近いヴェテラン女性教師。殆んどドイツ語を知らない来独したばかりの東洋人児童を預かって、さぞかし戸惑ったのではなかろうか。

御存知の通り、ドイツの小学校は毎日午前中だけで終る。この辺がドイツ教育制度のゆとりとでもいうのか、教育制度開闢以来と云われている。子供は、午前中は学校で預かるが、午後は昼食を含めて、各家庭で社会人としての教育や、所属のスポーツクラブなどへ行って、心身を鍛えるというものである。この制度のお蔭で、マイヤー先生は、午前の授業が終ると、和香を自分のカブト虫に乗せて自宅へ帰る。そして昼食を共にし、読書はもとより、芝刈り、雪かき、スーパーへの買物等々、夕方迄みっちり、「ドイツ語によるドイツ人生活」を体験させて下さったのだ。中でも印象深いのは、今では殆んど忘れ去られているプラットドイッチュ（北方低地ドイツ語の方言）の詩を教え込んだりしてくれたことである。今思うに、この老先生は、外国人児童をどうやって早くドイツ語に慣らすことが出来るか。御自分なりの実験をしていたのではなかろうか。お蔭で和香のドイツ語もめきめきと上達し、クラスの劇発表会では、主役を仰せつかったりして、ドイツ人参観者からも、「あれが日本の子？」とささやきが洩れる迄になれた。

やがて、フォルクスシューレ四年を卒業、和香はギムナジウムに進学出来たのも、このマイヤー先生御指導の賜物であった。

私達がこちらに帰国してからも、マイヤー先生は二度来日され、我が家をベースにあちこち旅行もされた。

今でも、マイヤー先生は、「ドイツのおばあちゃん」として、我が家族一同の中に存在しているのである。

この案は如何なものでしょうか。

ぐんま日独協会の皆様、この案は如何なものでしょうか。

する、税金の有効な使い方であり、「ふるさと創生」なのです。

第一の故郷〝ドイツ〟

対馬良一（館林）

私が西ドイツで生活した昭和三十年代は、一、二十歳から二十五歳までの独身時代で石炭産業が花形産業であった。ヨーロッパ州のルフトルーハーのウエストファーレン工業地帯である。ドイツ最大の三年間である。

ルフトルーハーの近郊のケルビッヒ地方でルッセルドルフ、ケルン、ボンという人口二千八万人の街へ出張する。

ドイツ人の家庭に招待されて、一年半生活したことがあるので、ドイツ人の家庭での生活を通じて、はじめて体験した。

レの入口に並ぶ。並んだ順番にテーブルに入るのである。言葉もつうじない。ドイツではドイツ人の家族が先になるまで待っている人のうしろに列をつくって並ぶが、ドイツでは一人で食べる。

ドイツ人の家族は、一度ビヤホールで酔っぱらい事はない。

人に迷惑をかけたり、イをチョン切り、なぜしめのタクシーの公衆トイレ事があるのを見た事は清潔である。ドイツの公衆トイレは用を足した後は清潔である。

ため店に吊すのの数々外国語の数々外国語は見知らぬ外国人の数々。日本では、ビールを飲む。体育的には、ドイツ人よりアルコールを飲む。ドイツ人は、酒に強い。

ビール事も知っている。ドイツ人は言う。「とはいえ、酒は、美味しい、美味しい、美味しいものはない。」

のはまずい、美味しいものはない。

いものはない。

けれはならない。

花の本数はかなら奇数でなり、

白い花はお悔みの意味であり、

情を表わす。赤いバラは相手に愛もある。

られず叱られたりもする。

た時に同じものを出されたため、次回に訪問したとき、味をかれ美味しかったとの答えをかけ、

出され、

ツの各地、十年前に家内と共に第二の郷里西ドイツ帰国する。休暇を利用して旅行した。

ヨーロッパ。各地。そして

ドイツ人は、若い時に青春のエネルギーをぶつけて頑張ったなら、

美しく成

りし、

かしい成績の美、

つかしい成績の美、

ギーをぶつけて頑張ったなら、

に第二の郷里西ドイツ帰国する。

ツの各地、十年前に家内と共

ヨーロッパ。各地。そして

ドイツ人は、若い時に青春のエネルギーを

ドイツ人は、

ドイツ人は、

ドイツ人は、

父とヒットラー総統

伊藤廉平（高崎）

ヒットラー総統は一九三三年から一九四五年までナチスドイツの党首として君臨し、英・米・佛・露の欧州列強を相手に第二次世界大戦を交え、ナチスの崩壊と共に地上より姿を消したドイツ第三帝国の元首である。総統の歴史上の功罪と特異な人物像はこのさい史家にゆずるとして、本論に入る前に少しばかり当時の日独関係を申し述べたい。

その時代、日独両国は極めて親密友好で一九三六年（昭和十一年）十一月には共産主義の脅威から国家を防衛する意味で日独防共協定が締結された。そして翌年にはイタリイも加盟した。

次いで昭和十三年夏にはドイツからヒットラー・ユーゲント（青少年団）が来日した。彼等は総勢十数名から成る心身壮健なる青年でドイツ国内から選抜された優秀なる代表達であった。彼等はスマートな制服に身を包み統制の取れた動作で終始行動し、日本の若人は全く魅了されてしまった。一行は日本各地でハイル、ヒットラーの大歓迎を受けて交歓し日独親善に多大の貢献を果して海路帰国した。

これに刺激された日本政府は早速に答礼の使節をドイツに派遣することに決定した。代表団の人員は来日したヒットラー・ユーゲントとほぼ同数として直ちに人選が行われた。その中の一人に私の父が選ばれた。団長は華族出身で子爵の肩書を持つ三島通陽氏が指名された。

当時東京都教育局の課長であった。父は副団長に推され事実上の代表団の指揮をまかされた。

一九三九年（昭和十四年）の六月この青年使節団は日本朝野の期待を担って出発した。

神戸港から欧州航路を利用して先ずイタリヤのナポリ港に上陸しイタリヤ官民の大歓迎を受け、それからドイツに乗り込んだ。ドイツでは昨年のお返しとばかり各地で歓迎攻めに会い訪問日程は多忙を極めた。そんな或る日大使館から三島団長と父に対し、ヒットラー総統よりの招待状がとどいているのでベルリンに来る様にとの連絡を受けた。予定を変更し急據総統官邸に参上した。ヒットラー総統は閲見室で二人を待ち受けていた。

総統は遠来の客をねぎらい昨年のユーゲント訪問の際の謝辞を述べるとともに大体次の様な趣旨のメッセージを寄せた。

「諸君は充分にドイツ各地を見学し勉強して頂きたい。そして参考になる所があれば遠慮なく吸収してほしい。青少年は国家の貴重な財産だ。」

「私は各国における青少年教育や制度に興味を持ち絶えず研究をしている。現在も英国に研究員を派遣している。」

「英国は先進国であり伝統ある優秀な民族である。学ぶべき所が多い。英国と親善関係を推進する事は欧州平和を維持する上にも必要と考えている。諸君も時間があれば英国を廻って帰国されると宣しいと思うが」とこんな内容の言葉を伝えた。

総統の隣りには当時ヒットラーの側近の一人と言われたヘス副総理がいて「日本人は昔から武士道精神があり、礼儀正しく勇敢な国民である」と述べ、日本通の一面をのぞかせていたという。

この時ヒットラー総統がとりわけ英国にこだわっていた背景には当時の複雑な国際情勢があった。即ち欧州全土にわたる民族問題、領土問題等、英独佛伊の意見が対立し首脳会談はすべて決裂した。翌年一九四〇年（昭和十五年）には英独両国は宣戦布告となった。同年九月にはベルリンで日独伊三国同盟が調印され、同時に軍事同盟も兼ねた。英国本土に対するドイツ空軍の爆撃は猛威を振るい、人員、建物に対する損害は大きかった。また、海上でもドイツ潜水艦による通商破壊戦が激化して、英国民は深刻な食糧難に直面した。欧州戦線ではフランス軍がドイツ軍に降服し、英国の大陸遠征軍はダンケルクに敗れた。

こうした欧州戦線は、一部にドイツ軍の華々しい勝利が伝えられた。「ブリテンの戦い」では、英国空軍の激しい反撃にあい、ドイツ空軍は大損害を受け作戦を中止する仕末であった。こんな時期（一九四一年）、その年の五月に世界中を驚かすセンセーショナルな事件が発生した。本項でも先に述べたヘス副総理の英国亡命である。ヘスは自ら戦闘機を操縦して、ドイツ領を飛び立ち霧の北海上空を越えて英国本土に達しパラシュートで脱出に成功した。ドイツ側はいっせいにヘス副総理の行為をなじり「彼は以前から精神異常者であり、狂人であった。勝手に軍用機を乗り出し、敵地に着陸する利敵行為を行った」として官職を剝奪し追放処分となった。

一方、英国側はヘスに関する一切のコメントを差しひかえた。ただし、彼がドイツ側で喧伝する様な精神異常者でなく〝正常人であり、すぐれたパイロットである〟と発表した。しかし亡命の眞相は謎に包まれたままであった。その内容が明るみに出た時、世界の人々は大きな衝撃を受けた。

ヘスはヒットラーの密命を帯び、和平工作案をたづさえ英国に渡ったと言うのだ。彼は極力英国との武力衝突を避けたかった。欧州の平和秩序を維持するには、英国と事をかまえる事は愚の骨頂である。彼には充分それがわかっていた。そのうえ英国本土上陸作戦と言っても、自国の海軍力で英国海軍に勝てる自信はない。一刻も早く英国と和解して戦闘を停止させる事が急務である。停戦がドイツを救う道だ。ヒットラーはこう考えて彼の側近の中でも信頼出来るヘスに和平工作案をたくしたのではないか。しかし、時すでにおそかった。英国民は度重なるドイツ空軍の空襲や戦闘行為でヒットラーやナチスに対し、いやがうえにも敵愾心が燃えあがっていた。そんな時に和平交渉など受け付ける筈はなかった。

しかし平和提案と言う大事な申し出を無下に一蹴する事は対外的にも賢明と言えない。それなら公表をひかえる方が無難であると考えた。これは推測であるが定説と見て良い。唯一の証人と言うべきヘスは、昨年八七年八月、九十三才の高齢を以て西ベルリンのシュパンダウ刑務所で生涯を閉じた。ナチス党幹部は、ヘスを最後に全員地上より消滅したのである。

父は生存中、私が「英国があの時ヒットラーの和平案を受け入れていたら欧州情勢は変わっていたと思うか。」という質問に対しこう答えた。「まず英国が提案を受け入れる事はあり得ない。その時代にはその時の流れがある。流れは言いかえれば潮の様なものだ。その勢いにさからう事は出来ないもんだ。」こういって笑っていた。あの時代から早くも半世紀が過ぎ去ろうとしている。

世界の地図は大きく変わったが平和である。平和とは素晴しいものである。この流れをいつまでも持続したい。父を偲び往時を回想し感無量のものがある。そしてこの地、群馬にも「ぐんま日独協会」が発足した。思えば日本とドイツは再び近くなった。

青春よ　ふたたび

清心幼稚園
黒田　寿（前橋）

「デカンショ、デカンショおで半年くらすヨイヨイ…。」この歌が私とドイツのつき合いの初めでした。この歌詞にはドイツの哲学者カント、ショーペンハウアーが盛り込まれ、私の大正ロマンを謳歌するきっかけとなりました。ドイツ映画「会議は踊る」「未完成交響楽」などの一画面や主題歌、そしてシューベルトの歌の一部が頭のどこかに残っています。

往時、日本の法津、経済、医学等の分野はドイツ語が主流だったのではないでしょうか。私も第二外国語としてドイツ語を選んだのですが、不勉強のため忘れました。

ただ英語にないレタリング的な「ヒゲ文字」や歯切れのよいリズミカルな韻律は魅力的でした。

ベルリンオリンピックのヒットラー。歴史が大きく揺れ動いて行きました。ナチスの軍靴の響きにそら恐ろしい気持、その一方でツァイス製ドイツレンズのカメラに憧れ、社会思想としてマックスウエバーの方法論に新鮮さを感じてから約四十年、ドイツは西独も東独もなく、遠い遠い国になってしまいました。

ところが、私自身「清心幼稚園」の裏方を受け持つ事になり、同園の歴史を調べているうちに、「フレーベルの幼児教育」が同園の長い伝統の中に生かされていることに気付きました。又、十数年前になるでしょうか。当時園児の父親杉本隆雄さん御一家がドイツに五年程出張され、更に姪家族もチュービンゲンに長らく留学したためか、ドイツは急に身近くなりました。

杉本さんの御帰国後、時々伺うドイツのお話は魅力そのものでした。特に杉本さんのお骨折でドイツから輸入した木製玩具は、今も園児にとって楽しい遊具です。

昨一九八八年夏、西独ウルム市から八名の音楽家が来園されました。その代表者を通じウルムの幼稚園との交流がはじまりお互に園児の作品を交換し合っています。

最近ドイツは私の延長線上にあり、青春時代が呼び戻されるような気持になっています。

4月に設立一周年記念パーティ

◎日　時：一九八九年（平成元年）四月十六日（日）
午後二時より（受付は一時三十分より）

◎場　所：群馬県民会館四階　第一・二会議室
（前橋市日吉町一―一四）（エレベーター利用）

◎費　用：参加費　一人五、〇〇〇円

◎申　込：3月下旬までに郵便振替にて送金して下さい。
（振替口座　長野二―〇三四九四六　ぐんま日独協会）

※当日はドイツ大使館より高官の出席が予定されています
（駐車場混雑のためマイカーは御遠慮下さい）

詳細はぐんま日独協会事務局（前橋市城東町[redacted]）
☎〇二七二―三一―四〇一九）までお尋ね下さい。

家族会員　三,五〇〇円

新刊紹介

『こんにちは、タンテマイヤー』

群馬大学附属病院
草津分院長・教授
白倉卓夫著

群馬大学附属病院草津分院長・白倉教授が三十年以上昔、南ドイツのビベラッハに留学生活を送っていた頃、こどもの学校の教師であるマイヤー夫人との交流を基にした物語である。

著者は医師であると同時に父親としての立場からドイツの生活を味わった訳であるが、詩人としての観察もきめ細かく、豊かな詩情に充ち溢れた物語となっている。ドイツに行って美しい自然に接する事は、確かに素晴らしい収穫であるが、ホスピタリティをそなえた人々との触れ合いは、何物にも替えがたい体験である。

江湖に一読をお勧めしたい。（売価一、二〇〇円）お申し込みは著者、または事務局まで。

編集後記

はじめて会報を発行する訳ですが、多くの方々のご支援により、沢山の投稿を頂き感謝しております。特に群馬大学学長・前川先生からのご寄稿は本会の誇りと言っても宜しいでしょう。次回は夏頃を予定しておりますので、どなたでも振って是非ご投稿下さるようお願い申しあげます。会報は会員相互の大切な交流の場ですから、一人でも多くの方のご参加をお待ちしております。会の性質上、原稿料は差し上げられませんが、郵送料と紙代はこちらが負担致します。今回校正に当られた方は黒田とめ子さん、杉本のぶ子さん、田上宏さん、土屋喜代子さん（何れも前橋市在住）の四人でした。編集不慣れのため5ページに集約しましたことをお詫び致します。

（事務局長　佐藤進一）

先達の衣鉢を継いで吾等今
遥かなる友と手を結ばん
日独の絆（きずな）は深し吾が故郷（ふるさと）
今ぞ結ばるゲゼルシヤフト
先達の厚き情（なさけ）は今も尚（なほ）
群馬に生きる日独協会